

「国際浅草学プロジェクト」設立記念シンポジウム

「国際浅草学の可能性」

＜発表者紹介＞

1. 氏名：井戸田 総一郎

(いとだ そういちろう)

2. 所属：明治大学文学部教授、同大学研究企画推進本部長

3. 研究テーマとその概要：

1973年 慶応義塾大学経済学部卒業。1978年 慶応義塾大学大学院文学研究科独文学専攻博士課程満期修了。1988年 ドイツ・アーヘン工科大学大学院文学研究科において Dr.phil.の学位取得。1991年よりアレクサンダー・フォン・フンボルト財団研究フェロー。1975年慶應義塾大学経済学部助手、助教授、教授を経て1999年より明治大学文学部教授。

学外では財団法人ドイツ語学文学振興会理事を務める。

次のようなテーマ領域について研究を進めている－1) 制度論を基盤とする比較演劇・劇場史、2) ドイツにおける古典生成とゲーテ崇拝の系譜、3) 文字と記憶、4) 明治期における文と言の問題、5) 学際的浅草学の構築。これらの領域を中心に据えながら、国際的な比較学の本格的な展開に努めている。

研究業績：Theorie und Praxis des literarischen Theaters bei K.L. Immermann in Düsseldorf 1834-1837 (ハイデルベルク大学出版局)、Schaulust-Erlebnisse auf der Kabuki-Bühne. Fallschirm- und Flugakrobatik im Theaterraum (ウィーン大学日本学研究所)、Kawabata Yasunaris Roman „Die Rote Bande von Asakusa“. Ein Tokyoter Stadtviertel zwischen Schaulust, Eros und Verkleidung (ウィーン大学日本学研究所)、「文学者と劇場—鴉外の『演劇場裏の詩人』を読む」(岩波書店)、「果てなきファンタジーとゲーテ崇拝」(岩波書店) などがある。



1. 氏名：セップ・リンハルト

(Sepp Linhart)

2. 所属：ウィーン大学（オーストリア）文献
文化学部教授、同大学東アジア研究
所所長

3. 研究テーマとその概要：

日本の社会、特に老年者の社会学、労働と余暇の社会学、娯楽の社会学、ポピュラー・カルチャー、そしてこれらの領域の社会史・文化史を研究。現在の主な研究テーマは、(1)拳遊びの研究、(2)幕末・明治期のチョンキナ踊の研究、(3)開港後から1900年頃までの日本の裸体文化と西洋文明の衝突の研究、(4)日本とドイツの流行歌・歌謡曲の歴史比較研究、(5)西洋の絵葉書における日本イメージの研究、(6)西洋の歌謡曲における日本イメージの研究、(7)天保改革から日露戦争までの風刺的錦絵の研究 (<http://www.univie.ac.at/karikaturen>)。

日本語の文献も含め、既に著作は多数。近刊も予定。



1. 氏名：エーヴェリン・シュルツ

(Evelyn Schulz)

2. 所属：ミュンヘン大学（ドイツ）アジア学
科教授

3. 研究テーマとその概要：

近代日本の文学と文化を中心に研究。近年は都市論に取り組んできた。とくに幸田露伴『一国の首都』と木村荘八『東京繁盛記』に注目。そこでは主人公がたいてい「散歩する人」であり、好んで路地に入って行くということに興味をもち、ここ数年は、日本において「散歩する人」とは何か（たとえばベンヤミンにおける「遊歩者(Flaneur)」との対比において）、また「路地」が東京においてどのような役割を果たしているかを問題にしてきた。永井荷風『新帰朝者日記』も、そういう観点から見直している。近代批判の意味ももち合わせた「路地」の再発見に大きな関心をもつ。



1. 氏名：イレイン・ジュールベル

(Elaine Gerbert)

2. 所属：カンザス大学（アメリカ）東アジア
言語文化学部現代日本文学准教授

3. 研究テーマとその概要：

これまでは、大正時代の小説、日本のユーモア、遊びと遊び論、人形とドッペルゲンガー、笑い、神道儀式、日本の小学校の国語教科書、日本の教育システム等を研究対象としてきた。現在は、視覚と文学作品の関連性に焦点を当てて研究。明治・大正時代に導入された展示、パノラマ、幻灯機、立体写真鏡、カメラや写真、イラスト、ショーウィンドーディスプレイといった新しい手法が当時の文学にどのように反映しているかに関心をもつ。現在、宇野浩二「夢見る部屋」、谷崎潤一郎「白昼鬼語」、芥川龍之介「浅草公園」、江戸川乱歩「パノラマ島奇談」を翻訳中。



1. 氏名：ローザ・カーロリ

(Rosa Caroli)

2. 所属：カ・フォスカリ大学（イタリア）東
アジア学研究所准教授

3. 研究テーマとその概要：

研究領域は、日本近現代史から琉球・沖縄史まで多岐におよぶ。具体的には、「日本民族」の概念の変化、近代国家と差別（賤称廃止令と部落問題、明治国家とアイヌなど）、日本外交史（特にイタリアとの関係）、戦争の歴史と記憶（広島・長崎・沖縄における戦争の記念碑、戦争の歴史とその用語）、歴史学研究（日本の歴史修正主義、喜田貞吉と日本民族論、戦争時代の歴史学、戦後における丸山真男と日本のアイデンティティ）、さらには琉球・沖縄の歴史（江戸時代から戦後まで）を研究している。



1. 氏名：マルガリータ・ウィンケル

(Margarita Winkel)

2. 所属：ライデン大学（オランダ）日本学・韓国学
学研究センター准教授

3. 研究テーマとその概要：

専門領域は「近代日本社会文化論」。カリブ海の文化人類学の研究についても豊富な研究業績があるが、のちに近現代の日本における言語・文化・歴史に強い関心を持つようになり、日本研究で長い伝統と実績を誇るライデン大学でその研究に本格的に着手。現在では特に江戸時代末期の出版事情を中心に、都市と文化の関係の研究を進めている。文化人類学的な手法によって、現代日本の都市文化の研究も手がけている。



1. 氏名：アンガス・ロキヤ

(Angus Lockyer)

2. 所属：ロンドン大学（イギリス）アジア・アフリカ
研究所日本史講師

3. 研究テーマとその概要：

日本の近代化を、元来西洋に生じた出来事である近代化というものの一つの例外的現われとして見るのではなく、全世界が経験した出来事の一つのヴァリエーションとして見る立場に立って研究。現在は、1860年代以来の日本において展覧会（海外での万国博覧会への参加、国内での数多くの展覧会の開催）がどのような役割を果たしてきたかを研究。日本におけるゴルフの流行についても調査中。また、日中戦争勃発以前の日本の1930年代を、戦争と挫折へと向かう時代としてではなく、複雑な世界情勢の中での危機に対応した時代として捉えることを試みている。

